416, 7.24
2004年
山梨日日新聞

昭和三十年代初め。子どものころ、家には時々「おこんじきさん」がやって来た。親は何かしら話をして、野菜や米を持たせた。「人間の社会には、どうしてあちこちに悲しみが転がっているのだろう」。縁側から見ていた、「おこんじきさん」の後ろ姿に思った。

だが、悲しみだけでない。「お」と「さん」が付く、その呼び名は奥が深い、と思う。

「自分も同じ境遇になるかもしれない。社会の痛点を、今は、あの人が引き受けてくれているという思いが『おこんじきさん』の呼び方にはあった。社会がその存在に畏敬(いけい)の念を持っていた」

ドイツの思想家でローマ・カトリック教会の神学者、ニコラウス・クザーヌス(一四〇一―一四六四年)を研究する。「知ある無知」などを著し、イスラム教との宗教対立の時代に「協和」を説いたクザーヌス。中世の思想家を専攻したのは近現代の人間観に抱いた「違和感」からだった。

大学時代は主張する学生運動が盛んなころだった。主にマルクス主義が語られた。だが、「人は欲望を満たせば幸せになれるという理論」に映った。違和感が残った。

「近代的な人間観を一言で言えば個人主義」。自他をきっちり分け、「あの人はあの人、私は私と、自己責任でとらえて切り捨てる」。その延長線上にあるのが個人の欲望を満たせば、幸せになるという考え方。そこには、「おこんじきさん」という呼び名に込められたような思いはない。

個人主義への違和感から「近代以前の人間観を探る」ため、中世の思想家を研究し、現代を照射する。

そうした中で、日本人の持つ「いたみ」の感覚に着目する。自分の体や心だけでなく、友を「いたみ」、食べ物や家などにも「いたみ」を感じる。個人主義とは対照的に、自他をはっきりとは区別することなく、「いたみ」を共有できる感覚が日本人にはある。

よく言われる「人に迷惑を掛けなければ何をしてもいい」という発想には異議を唱える。「迷惑をかけずに生きられるという前提が間違い。人は他の人と一緒にいるだけである意味、迷惑をかけている。だからこそ困った時、手をさしのべ合えるはず」。個人主義の対置としてそう考える。

例えば環境問題も、「人間が欲望を満たすため、ほかが見えなかった」結果として生じた。「哲学から文明を考えるのは哲学の課題」。個人主義の限界をとらえ、「日本的な視点でどう貢献できるのか」を自らに問う。

〈武井 功〉

東京発 元気印人

早稲田大商学部教授(哲学)
八巻 和彦さん

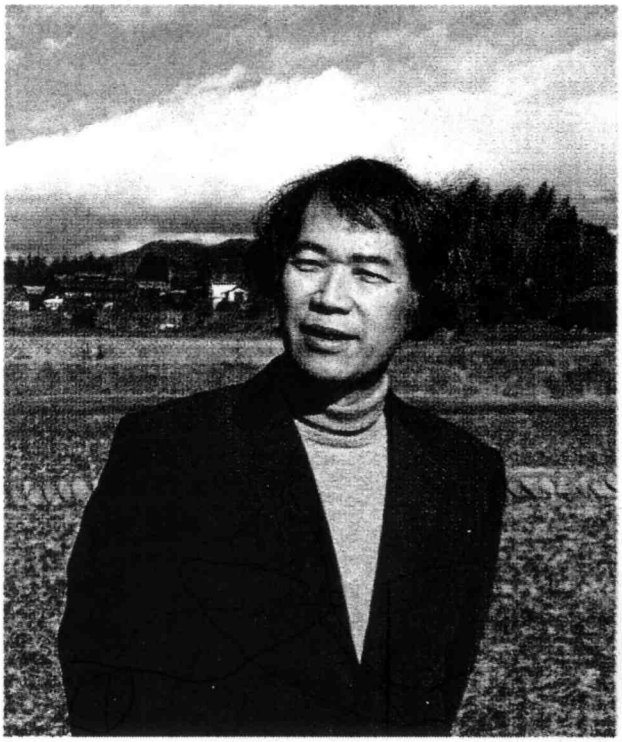
中世から現代を照射

日本的な「いたみ」共有を

やまき・かずひこさん 高根町生まれ。早稲田大卒。東京教育大博士課程中退。早稲田大広報室長。2000年に続き、来年3月には海外の研究者を招き、クザーヌス研究の国際会議を開く。57歳。

山梨に〈根と土〉を掘り起こす

八巻　和彦



「〈根と土〉の意味を掘り起こしたい」と話す八巻和彦さん＝北杜市高根町

やまき・かずひこさん　1947年生まれ。早稲田大卒、東京教育大博士課程中退。早稲田大広報室長、同大商学学術院教授（西洋哲学専攻・文学博士）。北杜市高根町。

高度成長の時代から、私たちはあまりにも〈土〉を嫌ってこなかっただろうか。泥道がアスファルトで覆われることを喜び、土を耕す生業を厭（いと）い、土壁よりは合板とコンクリート造りの家を好み、地面からできるだけ遠い生活を高級でオシャレだと考えてきた。その極みが超高層マンションに住むヒルズ族だと言うのは、断定が過ぎるだろうか。

週の間を東京で働き、週末にふるさとに帰るという生活を続けている私は、金曜日の夜、車を降りて庭の土を踏みしめると、名状しがたい安らぎを感じる。無意識のうちに深い息をすると、夜を包む空気にかすかな土の香りがする。その香りは季節によって変わるが、土に養われるさまざまな生命の存在を静かに知らせてくれる。

土壌は、植物にとってだけではなく、人にとってもまた、大事なものだ。有機分豊かな土からの恵みで栄養を取り、厚い地層を通して涵養（かんよう）されたおいしい水で命を延ばすというばかりではなく、地面に支えられて立ち、地に足をつけて生きてこそ、初めて人間らしく生きていることになるはずだからだ。

一本の樹木が立派に育つためには有機分に満ちた土壌が必要であるように、人が人らしく生きるためにも豊かな〈土〉が必要だ。青年時代に生まれ育った土地を離れてみることは、トマトの移植と同しいように、その人の寿命を縮めやすいようだ。親孝行をするつもりで故郷から都会に呼び寄せた親が、ほどなくして病にかかり、あっけなく亡くなってしまった、という話をよく聞く。これは、人もまた土のなかに根を張って生きていることをあらわしているだろう。

個人としての人にとってだけではなく、人の集団である社会にも〈土〉の存在は、近くに豊かな自然が必要であるとされてきた。そして、いたずらに膨張して自然を破壊した都市は、そのために衰退し滅びたと言われている。つまり〈土〉をないがしろにしたことのツケである。今、大都市と地方の格差を広げつつある日本には、このことが当てはまらないのだろうか。

東京を、外国からもよく見える一本の「樹木」に例えると、地方はそれを支えて養う〈根と土〉と言えるだろう。地方は、都会の住民にリフレッシュの場を与えるばかりでなく、首都の仕事を担いうる人間力豊かな人材を涵養して供給する場でもある。

早稲田大学の創立者である大隈重信は、卒業してゆく学生に対して、「諸君は日本一の村長になりたまえ」と言ったそうだ。九州の佐賀から上京して、維新直後の政府で十年以上にわたり首相をはじめ三つの大臣を兼務して奮闘した大隈は、幕府の所在地であったにもかかわらず東京という都会には優れた人材が乏しいことを知った。

日本の近代化を成功させるためには、全国津々浦々の国民の涵養が不可欠であることを痛感したのだ。だから彼は、早稲田を設立する十年前に、閣内の反対を押し切ってまで、全国一律に義務教育制度を実施していた。

この大隈の呼びかけに応えた卒業生が山梨県にもいた。典型的な人物は、村長になる前に病没した丹沢正作である。彼は今の市川三郷町で生まれて早稲田で学んだ。その後、故郷に帰って旧上野村役場に勤めながら、自ら開設した「平民学校」という夜学で農民に法律や英語を教えて、「山の先生」と尊敬されたという。

「土に生れ土の生むものを喰（く）って生き而（そ）して死す畢竟（ひっきょう）我々は土の化物（ばけもの）である土の化物に一番適当なる仕事は農である」と、丹沢は小作組合の「創立の趣旨」に記している。大正末年、五十歳の時に助役で亡くなったが、その遺徳を偲（しの）ぶ人々により昨年「山の学校」が復元されたことは、本紙でも報道された。

丹沢のような先人の努力を想（おも）い起こしながら、今なお